

# 何故同志社はキャプテン・ジェインズを 獲得できなかったのか

森 永 長壹郎

## まえがき

本稿はデイヴィス (J. D. Davis) がジェインズ (L. L. Janes) から手紙を受け取ったことをクラーク (N. G. Clark) に知らせた1876年2月23日から、ジェインズの帰国を報告する1877年5月5日までのアメリカン・ボード日本ミッション内部で、いかに彼らがジェインズ獲得に熱中したかという状況に光を当てる。周知のようにミッションはジェインズを同志社に招聘することができなかった。デイヴィスにとってジェインズは「提案されている大学 (proposed college) の長 (head) となるべき人物」(J. D. Davis to N. G. Clark, Oct. 16, 1876) であり、彼が「トレーニング・スクールの大学部門 (collegiate part) を担当すれば、宣教師たちは解放されて直接伝道の仕事ができるし、ジェインズの強い影響力を手に入れることができる」(同上) とデイヴィスは考えていた。

まず本稿の中心を占める3人の人物を紹介し、その関係を述べておきたい。3人とはデイヴィス、クラークそしてジェインズである。

デイヴィスはピロイト大学在学中に志願兵として南北戦争に参加した。戦後大学に復学し、卒業後シカゴ神学校で学んだ。1871年10月、マサチューセッツ州セーラムで行われたアメリカン・ボードの年会のとき、デイヴィスは年会に出席していた新島襄に会った。そのとき新島はアンドーヴァー神学校の学生であり、デイヴィスは日本に行こうとしていたのである。

1871年12月1日に神戸に到着したデイヴィスは兵庫県の<sup>さんだ</sup>三田で伝道し、神戸で英学校を開いた。1875年新島が京都に英学校を開くと、デイヴィス

は京都に住まいを移し、新島と共に同志社英学校をスタートさせた。

クラークはアメリカン・ボードの総主事であった。新島はアメリカン・ボードから派遣された準宣教師である。アメリカン・ボードは1810年に創設されたアメリカ最古の宣教団体で、最初は超教派であったが、だんだんと会衆派が中心になっていった。起源は1806年にウィリアムズ・カレッジ (Williams College) の学生6人によるHaystack Meeting にさかのぼる。中心人物はミルズ (S. J. Mills) であった。彼らは海外伝道のために祈った。ミルズはウィリアムズ・カレッジを卒業するとアンドーヴァー神学校 (Andover Seminary) へ、第1期生として進学し、The Society of the Brethren を創った。ミッションを組織する必要からできたのがアメリカン・ボード、即ち、American Board of Commissioners for Foreign Missions (ABCFM) である。新島が1874年にヴァーモント州ラットランドで行われたアメリカン・ボードの年会に出席して、「日本にキリスト教主義学校のために募金を！」(本井康博著『新島襄と建学精神—「同志社科目」テキスト—』 p. 57) と訴えたとき、クラークはボードの総主事であった。

ジェインズは熊本藩立の熊本洋学校が1871年に創立されたとき、教師として迎えられた。彼は宣教師ではなく、アメリカの陸軍士官学校出身の元軍人であった。紹介者をたどると、フルベッキ、フェリス (改革派ボードのフェリス主事の名をとったのがフェリス女学院)、そしてスカダー (インドで伝道したアメリカン・ボードの宣教師、ジェインズの義父) となる。ジェインズは軍人であったが、熊本洋学校では彼からキリスト教の感化を受けた生徒が続出した。1876年1月末に卒業生のうち約40人が熊本の花岡山に結集して祈祷会を開き、奉教趣意書に連署して決意を表明した。その内容はキリスト教を奉じて国のために尽くす決意を宣言したのものである。1876年、洋学校は廃校となり、ジェインズの教え子たちは彼の紹介で同志社に入学した。その数30数名である。同志社は1879年に最初の卒業生15人を出す、全員が熊本洋学校から来た学生であった。

本稿での3人の関係は1876年2月23日にデイヴィスがジェインズから手紙を受け取ったことをクラークに知らせたときから、1877年5月5日に

ジェインズの帰国を報告するまでの1年数か月のことである。

## I. 時既に遅し

日本ミッションはジェインズがアメリカに帰国する前に、彼が日本で採用されることを期待していた。待ちに待ったクラークからの手紙がついにミッションに届いた。しかし、その内容たるやミッションが予期せぬものであった。クラークの手紙が見つからないのでレヴィットの手紙からその内容を見ることにする。「ミッションのメンバーになりたければ願書を出すように」(H. H. Leavitt to N. G. Clark, 1877. 3. 3) とクラークがジェインズに書いたとレヴィットは伝えている。それにレヴィットは反論する。「ミッションが過去6か月間期待して待っていたのは、運営委員会から[ジェインズへ]の招待状」(H. H. Leavitt to N.G.Clark, 1877. 3. 3)であったとレヴィットは悔やんでいる。即ち、6か月あるいは8か月にわたり、ボードとミッションは手紙でやりとりしていたにもかかわらず、ボードはミッションの気持ちを理解していなかったということになる。デフォレストもジェインズとボードが正式な関係を結ぶためには「心からの熱意ある招待状を」(J. H. DeForest to N. G. Clark, 1877. 3. 3)送らねばジェインズを失う恐れがあると書き送る。ここで初めてボードはミッションの真意を理解した。ボードはミッションに宛てて、「ジェインズの現地任命を許可」(『アメリカのサムライ』pp. 296-297)する手紙を書いた。ミッションはすぐにその旨をジェインズに伝えたが、時すでに遅しであった。

## II. 経過

デイヴィスがクラークに報告したジェインズからの手紙の内容は、デイヴィスによると、ジェインズは「救い主の王国を築く」(J. D. Davis to N. G. Clark, 1876. 2. 23)のが目的だという。彼は5年前から熊本に来て、藩立の熊本洋学校で教えているが、卒業生及び現役の学生を同志社に、受け入れてもらえるか否かを打診してきたというのである。彼は改革派に属し

ているが、アメリカン・ボードのもとに自分の若者をおきたい。なぜならアメリカン・ボードは「真のUnionの信条と最も一致している」(J. D. Davis to N. G. Clark, 1876. 2. 23)というのがジェインズの理解であったからである。デイヴィスはジェインズのことを「闇の中で輝く太陽のように輝いている男」(J. D. Davis to N. G. Clark, 1876. 2. 23)と書いている。内陸で5年間、海を見ることもなく働いているジェインズの姿にデイヴィスはジェインズの熱意を見た。そして彼の生徒40人以上がキリストを信じ、自発的にキリスト教の結社を組織し、必要なら喜んですべてを捨て神に従う誓いをたてたこと、そして10人が神学校に入るのを待っていることをジェインズがデイヴィスに書いてきたのであった。

ジェインズについての手紙を受け取ったクラークは驚き、デイヴィスに返事を書く。クラークの反応はジェインズについて好意的に理解していた。「もしもジェインズの信仰や教義がしっかりしており、良い仕事をしている人物でミッションとの付き合いを歓迎するとデイヴィスが思うのなら、運営委員会は喜んで受け入れる」(N. G. Clark to J. D. Davis, 1876. 4. 6)意志を表明していた。しかし、その一方で現状では宣教師をこれ以上増員しにくい状況についても述べていた。「残念ながらこれ以上の人を日本ミッションに送ることはできません。ボードは他のミッションと較べて日本ミッションにはすでにかなりのことをしてきているのですから」(N. G. Clark to J. D. Davis, 1876. 4. 6)と念を押している。

ジェインズにほれ込んだデイヴィスは出来るだけ早いうちにボードとジェインズが直接に接触することを望んでいた。「ジェインズを獲得するためには何らかの計画が今すぐにも示されることです」(J. D. Davis to N. G. Clark, 1876. 7. 24)とクラークの動きを促している。

1876年7月24日のデイヴィスの手紙ではジェインズが江戸の官立学校に行くことがほぼ確実とされていたが、10月16日の手紙では、大阪高等学校(Osaka High School)で働くことになりそうな様子であった。これは「アメリカン・ボードはジェインズに何をしたいか」(J. D. Davis to N. G. Clark, 1876. 10. 16)をジェインズは、ボードにはっきりと聞きたいと思っていたからである。デイヴィスは同じ手紙の中で、「キャプテン・ジェイン

ズはこの仕事のために今なら獲得できますが、遅れは禁物です」(J. D. Davis to N. G. Clark, 1876. 10. 16)と不安を隠しきれない。

デイヴィスがジェインズ獲得に動いているとき、この案に反対する者がいた。レヴィット (H. H. Leavitt) である。レヴィットは大阪に駐在するアメリカン・ボードの宣教師で、外国の資金を使って伝道や事業をすることに強く反対していた。

ミッションは前の年会で反対者なしの全会一致で、3人の委員会(デイヴィス、ギューリック、ゴードン)を任命し、ジェインズと連絡をとり、彼を獲得するというのが投票の結果であった。委員会がジェインズに連絡をとると、ジェインズからはボードのために働きたいという申し出を得た。

大学に反対しているレヴィットは委員会のことは何も知らず、ジェインズに手紙を送ったため、ジェインズはしばらくボードのために働くことをあきらめ、1878年7月まで大阪で教鞭をとる契約する。ミッションが2度も全会一致で決めた政策にレヴィットは反対し、秘密に手紙をジェインズに出したので、デイヴィスはジェインズの招聘問題は遅れると判断した。

1876年12月20日付けの手紙でボストンの運営委員会が「ジェインズ獲得を承認 (authorized)」(N. G. Clark to J. D. Davis, 1876. 12. 20) したとの知らせを受け取った。しかし、この段階でデイヴィスはジェインズの健康を気遣っている。「ジェインズは大阪の学校に行くより、6か月または1年、アメリカで休息すべきだった」(J. D. Davis to N. G. Clark, 1876. 12. 30) という。大阪英学校の不道徳極まりない状況がジェインズの神経を疲労させ、それは目を悪くする兆候として現れていた (J. D. Davis to N. G. Clark, 1876. 12. 30)。

デイヴィスと同様にジェインズも帰国のことを考えていたが、「心の中ではコーネル大学に職を得たい」(J. D. Davis to N. G. Clark, 1876. 12. 30) と思っていた。

1876年の暮れに、大阪で宣教師会議があった第1日目にデイヴィスはジェインズを訪問し、ジェインズの目指す教育について聞いた。その話をセッションで報告すると、ジェインズ獲得に反対していたレヴィットが先

ず決議案を書き、いくつかの修正後、全会一致で熱狂的に採択された。決議案は次のようなものである。キャプテン・ジェインズと大阪の官立学校との関係が間もなく終わることは明らかである。都合が付き次第、ボードはキャプテン・ジェインズを京都のトレーニング・スクールの普通部門担当者に任命すること。彼自身と彼の考えに賛同し、しかも宣教師の資格を持つ教師のために寄付金を募ること。この寄付金は日本人教会がそのすべての重荷を負えるようになったとき、アメリカン・ボードに返済されるべきこと。(J. D. Davis to N. G. Clark, 1876. 12. 30) もしもこの要求が速やかに実行されるならば、任命の知らせは、彼がアメリカに帰ったほうが賢明であると考える前に、彼のところに届くであろうし、彼はそれを喜んで受けるであろうというのが、ミッションの思いであった。また、ジェインズが日本でなした伝道の仕事は誰にも引けをとらないし、彼は仕事の結果を現在も将来もアメリカン・ボードと関連付けている。彼が忠実に働き、5年間で輝かしい結果を得た日本で彼を任命する事は当然である。彼が帰国の費用を受け取るというのなら、帰国の費用を出すと申し出るべきだともミッションの思いとして表明された。決議案が採択されたことはジェインズに知らされた。決議案はボストンでも検討され、心から支持を得たし、クラークはついにジェインズに手紙を書いた(N. G. Clark to J. D. Davis, 1877. 2. 14) とデイヴィスに知らせている。

ボードがミッションの12月決議を知らずにジェインズに手紙を出したことで事態はもつれた。それはレヴィットのクラーク宛て手紙から判断される。

レヴィットは運営委員会はキャプテン・ジェインズについて積極的な行動をとるべきだという。ボードの行動はミッションを当惑させるものであった。招待状が出されるべきなのに、「ミッションのメンバーになりたいとボードに願ひ出るべきだ」(H. H. Leavitt to N. G. Clark, 1877. 3. 3)と書いてきたのである。これではジェインズが望まれているとは考えられないというのがレヴィットの主張である。「ジェインズにはボードに願ひしなければならぬものは何もなかった」(H. H. Leavitt to N.G.Clark, 1877. 3. 3)からである。「もしも彼が来てくれるのなら、それはボードから

の招待状がなければならぬし、これが当然のことである」(H. H. Leavitt to N. G. Clark, 1877. 3. 3) とレヴィットはいう。ジェインズはボードのメンバーになりたいなど少しも思っていないし、将来の見通しでは、全くの独立人でありたいと思っているのだ。ミッションが過去6か月間期待して待っていたのは、運営委員会からの丁寧な招待状(H. H. Leavitt to N. G. Clark, 1877. 3. 3)であったと悔やんでも悔やみきれない様子である。この手紙を読んだジェインズは、「ボードの度を越した態度を痛感したはずだ」(H. H. Leavitt to N. G. Clark, 1877. 3. 3) とレヴィットは手厳しくクラークを批判し、「そのような面倒な仕事から解放されたい」(H. H. Leavitt to N. G. Clark, 1877. 3. 3) と述べ、結論として、「この手紙の主旨を誤解されないことを信じています。私はあなた方がわれわれの立場からこの問題を見ることができるよう努めているのです。誰かを非難するつもりはありません」(H. H. Leavitt to N. G. Clark, 1877.3.3) とレヴィットは手紙を締めくくる。

次にデフォレスト(J. H. DeForest)の反応を見てみよう。

日本ミッションは6か月以上にわたってキャプテン・ジェインズにミッションの一員になってもらう問題について考えていることをジェインズが知っていること、彼を獲得することについては、繰り返し承認されているが、決定されたかという点、曖昧な点もあるとデフォレストは指摘している。デフォレストがクラークの手紙を解釈するに、「事柄(events)が大変早く動いているので、ボストンでの決定はほとんど役に立たないので、われわれのために決定をあきらめた("You virtually gave up deciding for us")」(J. H. DeForest to N. G. Clark, 1877. 3.3) とデフォレストは理解した。そして、「このケースはわれわれの手にまかされた」(J. H. DeForest to N. G. Clark, 1877. 3. 3) ように思えるとデフォレストは書き送っている。

更なる問題は「ジェインズを家族と共に個人としてアメリカに行かせるか」、または「われわれの一員として、このミッションを代表する権利を持ってアメリカに行かせる」(J. H. DeForest to N. G. Clark, 1877. 3. 3) かであるとデフォレストはいう。ミッションとしては、これがジェインズ獲得について残された最後のチャンスとデフォレストは考えていた。ところ

が事態は急変した。ジェインズの子供に熱がでて危険な状態になったのである。予定の旅を延期せざるを得なくなった。しかし、ゆっくりした、確実性のないボードとミッションの行動は、キャプテンをして次のように言わしめたのである。「ボードには喜ばせる人がたくさんいるのですね」そして「ボードのもとで働くかどうかは、私にとって良心の問題です。」(J. H. DeForest to N. G. Clark, 1877. 3. 3) 正式な関係を結ぶために「心からの熱意ある招待状」(J. H. DeForest to N. G. Clark, 1877. 3. 3)を送らなければ、ジェインズを失う恐れがあるのみならず、その可能性があるとしてデフォレストは主張する。正式な招待状がボストンから来ない限り、ジェインズ獲得に失敗するかも知れないと思ったミッションは、ジェインズのアメリカ行き費用を出してまでも彼の獲得を望んでいた。「キャプテン・ジェインズが帰国するのにお金を貸しました。彼はそのお金をあなたからの助成金 (grant) として受け取ることを拒否すると私には思われます」(J.D.Davis to N.G.Clark, 1877. 5. 5)。日本ミッションはそこまで腹をくくってもジェインズ獲得に意義を認めていた。

「伝道団に現地任命を許可する手紙が届いた」(『アメリカのサムライ』pp. 296~297)のは1877年4月5日であった。このことはジェインズに伝えられたが、ジェインズの返事は伝道団の申し入れを受け入れられないというものであった。ジェインズは日本ミッションに、1877年4月16日付けで手紙を書いた。

### III. ジェインズの手紙

ジェインズが日本を去る前に、ミッションが彼を招待することを決意し、アメリカの教会ではミッションを代表できるようになったことをジェインズは感謝している。しかし、ジェインズは「いくつかの方面で熟慮していることがある」(L.L. Janes to the Members of the American Board Mission in Japan, 1877. 4. 16)と言い、「確実に日本に戻る確信もない」(同上)と続けている。そしてジェインズは「今の自分がそうであるように、『完全に独立と自由』でありたい」(同上)とミッションのメンバーになる

ことを断わる第1の理由にしている。

第2の理由 ミッションのトレーニング・スクールで基礎科学部を組織し、運営することはイエスの愛をもって日本の若者を鼓舞することになるかもしれないが、1つの仲間（clan）に誘惑されることは他のものにとって深刻な障害となるかもしれない。

第3の理由 今までミッションと正式な関係をもったことがないし、仕事上の会合（business meeting）でミッションと会ったことがないので、仕事について十分に知ることは不可能である。ジェインズは教育、経験あるいは友人関係（associations）に資格がないし、ミッションとして自分を求める緊急性もない。

以上、3つの理由を書いて断り状としている。

ジェインズは書いていないが、私の見るところ、当事者のジェインズとボードの手紙によるか、直接会うか、いずれにせよ、直接の接触がなかったことがジェインズがミッションの要望を受けなかった一番大きな理由である。体調や就職のことを気にしながら、ジェインズはボードからの手紙を待っていた。最終的には6か月も待たされたことに嫌気を感じたのである。縁がなかったとしか言いようがない。

#### **IV. クラークはなぜ早々にジェインズに 手紙を書かなかったのか。**

ここまでくると、クラークがなぜジェインズに手紙を書かなかったのか、理由が見えてくる。

1つは、ボードとしては日本ミッションに十分のことをしているのに、それ以上の費用は出せないということ。

2つ目は、ジェインズ健康状態である。彼の健康状態は大阪の学校に就職するよりもすぐにアメリカに帰るべき状態にあったこと。

3つ目は、ミッションがジェインズの獲得を欲しているのは、ジェインズがミッションに参加したいと思っていたとボードが誤解していたこと。

## 結語

ミッションとボードの間にやり取りされた手紙の内容から以上のようなことが読み取れる。手紙になかったことの中には、ジェインズが平信徒であったこともボードの決断を鈍らせた原因の1つではなからうか。そして伝道を目的とするボードとしては、「彼[ジェインズ]はミッションが求めている大学を始める人物」(N. G. Clark to J. D. Davis, 1876. 5. 3)とは認めていても普通教育のために資金を投入することにも抵抗があったのではないかと推測する。不足していたものが他にあるとすれば、新島がボードにも、ハーディにもジェインズのことを書かなかったということである。後日、クラークはデイヴィスに宛てて、「ハーディはキャプテン・ジェインズに関して彼の友人[新島]から手紙をもらったことはなかったし、ハーディはキャプテン・ジェインズを保障するのに大いに当惑し、悩んだ」(N. G. Clark to J. D. Davis, 1877.7.28)と書き送っている。それから2か月後、ついに新島がハーディにジェインズのことについて手紙を書いたとデイヴィスはクラークに報告(J. D. Davis to N. G. Clark, 1877.9.27)している。それによると、新島が苦悩したのはキリスト教主義の大学という考えに立つと、「希望と恐れ」(同上)が新島の心に埋まって(have buried)いたというのである。ここにこそ新島の苦悩があったことは想像に難くない。「教育そのものはボードの第一義的な目的ではなかった」(『全集』⑩、p. 186)ことを新島は知りつつラットランドで演説したことを思い出し、教育を目的にジェインズを招聘することについて悩み、躊躇していたのかも知れない。ジェインズが日本ミッションの提案を拒否し、数か月前にアメリカに帰国したとき、「彼[新島]の心は失望で沈んだ」(同上)とデイヴィスは記している。更に時を経て、デイヴィスがクラークに書き送った中に、「ジェインズは神学教育(Theological education)を受けていないので、はっきりと定義された神学上の学説(clearly defined theological system)を持っていない」(J.D.Davis to N. G. Clark, 1878.3.8)述べているが、新島にとってもこの点に不安があったろうことは想像できる。

デイヴィスをはじめ、新島も含め、ミッションのメンバーはどれほどがっかりしたことか、わかるような気がする。縁がなかったと思わざるを得ない。

## 資料

Letters from J. D. Davis to N. G. Clark

Letters from N. G. Clark to J. D. Davis

A Letter from H. H. Leavitt to N. G. Clark

Letters from J. H. DeForest to N. G. Clark

A Letter from L. L. Janes to 不明

フレッド・G・ノートヘルファー著、飛鳥井雅道訳『アメリカのサムライ』（東京：法政  
大学出版局、1991）

本井康博著『新島襄と建学精神』—「同志社科目」テキスト—（京都：同志社大学出版  
部、2008）